

横浜の地域文化を考える・応援する



最新情報・詳細はこちら <http://www.y-artsite.org/>

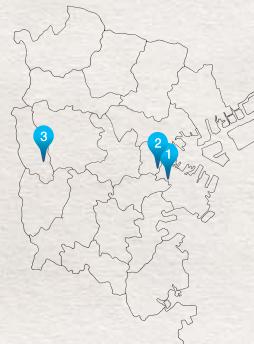
ヨコハマアートサイト



2016
Vol.

001

「特集 居場所で出会う」



居間のような 客間のような

1

ご飯のにおいがする 毎週火曜日の居場所

おやつの焼き菓子ができあがった午後3時。みんなの歓声と香ばしい匂い。中区・石川町にあるカドベヤでは「こども☆おとなカフェ」を試験的に始めた。

毎週火曜日、同じ場所で同じ誰かがいるのが「カドベヤで過ごす火曜日」のモットー。クリスマス、大みそか、台風の日でも、火曜日ならばカドベヤは開いている。

運営委員会の横山千晶さんは、19世紀のイギリス文化の研究者だ。炭鉱町で過ごした幼少期。経済

的格差がある中でも、個人の個性そのものに尊敬が集まっていた原風景が、産業革命以降のイギリスとつながった。富裕層と移民が急増し混沌とした社会で生まれた地域福祉活動に関心を持ち、勤務大学の後押しを得て、2010年からカドベヤの活動を開始した。

もともとは近隣の寿地区に住む高齢者の参加を想定していたが、今は子どもも女性も訪れる。横山さんは「この社会って生きにくい。『参加』から排除されている人はたくさんいる。そこに行けば見知った顔があって元気?と声をかける/かけられる場所は貴重。



人はケアしながらケアされているんだと思います」と居場所の意義を説明する。

日が暮れればアートワークショップの時間だ。この日は絵本と遊ぶのがテーマ。擬音語だけの絵本と参加者が取組み合う。「人は、自分を表現して誰かに伝えたいもの。生きている人の気持ちが変化すればそれはアート。私にとってはキッチンに誰かが立ってるだけでもアートなんです」と横山さん。

いつの間にか大人と子ども、大勢の参加者が集まっている。またいい匂いがしてきた。全員分の夕めしができあがったようだ。

2

台所に立つ親のように大人になるまでの時間を共に過ごす

西区・老松町。野毛山動物園へ続く坂の途中に横浜市青少年交流センターはある。2002年にオープンし、ふりーふらっと野毛山の愛称で親しまれるこの施設は、家とも学校とも違う子どもたちの行き場のひとつだ。この場所を訪れる目的はさまざまだが、どんな子どもたちも、まずは受付で声をかけられる。「寒くなってきたね」「テストは終わったの?」。お菓子作りや音楽ライブなどの自主企画も盛んで、その多くは利用者の



中高生が中心となって運営される。「大人はお手伝いだけ。もどかしい時もあるけど、自分たちでやるということが大切」と微笑むのはオープン当初から子どもたちを見守ってきたコーディネーターの松田利恵さん。14年間、この受付で数多くの子どもを受け入れ、見送ってきた。

1970年に造られたこの建物は「横浜市勤労青少年センター」としてスタートした。今もロビーに残るバーカウンターは、当時の名残だ。当時、慎ましく生活を送っていた若い恋人同士が、仲間と共に、ここで結婚式を挙げたこともあるという。

長い間、多くの青少年に寄り添ってきたこの建物は、耐震上の都合からこの春に閉館となる。横浜市青少年交流センターは、桜木町の駅前にあるびおシティへと移転が決まった。「建物が変わっても、居場所をつくっていくのは人ですから」。今日も受付には、子どもたちの成長を見守るコーディネーターの姿がある。

みんなでつくる みんなで見守る

瀬谷区・阿久和向原第二公園は住宅地の中にある高台に位置する。

2013年、この公園に一軒のログハウスが建てられた。地域住民が部材キットを使用して手作りした「見守りの家」は、持ち寄りの本やマージャンセット、木製のおもちゃなどが並ぶ憩いの場だ。柔らかな光が差すこの日も、幼稚園から

帰ってきた男の子がふらっと訪れ、その場にいた大人を誘ってボードゲームを楽しんでいた。予約不要で、地域の誰もが自由に使えるという点も魅力の一つだと言う。サークルが会議をしている横で子どもたちが遊んでいるといった風景もここでは当たり前。一戸建てが多く、高齢化の進む地域にとって、世代や職業を超えてゆるやかに



交流することのできる貴重な場だと語るのは、ログハウスづくりでも活躍した「おやじの広場」メンバーの田中実さん。「サラリーマン時代は、近所づきあいも家族に任せていた。こういう場所ができる、最近は道ですれ違ったときに話す相手も増えたよ」。

見通しの悪さからにぎわいの少なかった公園も、今では地域の拠点となりつつある。

自分を待っている 誰かに会いに行く

「カドベヤで過ごす火曜日」をはじめ、ヨコハマアートサイト2015が支援する活動の中でも、拠点形成や、そこで生まれるコミュニティの醸成を目指す事業は少なくない。物理的な場所を持った活動に限らず、「『パークは僕らの秘密基地』プロジェクト」が連携を行ったプレイパークのように空間としてゆるやかに誰かを受け入れる活動もある。一人と一人が出会うその場にアートの力が求められている。

P.1/P.3左 西区・横浜市青少年交流センター(ふりーふらっと野毛山)
P.2 中区・カドベヤ
P.3中央/右 瀬谷区・見守りの家



誰かの視点で発見、共有するまちあるき

戸塚駅からバスに揺られ、少し行くと、突如ぽかんと大きく空いた土地、旧・深谷通信所の跡地があります。その前に建っている深谷小学校のコミュニティハウスが、今回の会場です。

地域文化を考え、交流するための場「アートサイト・ラウンジ」。1月28日に開催した第8回は「まちあるき」でした。ゲストは市内を中心におり、20年以上に渡り続けているジタルコースのまちあるきをガイドする取り組みを、20年で横浜シティガイド協会の嶋田昌子さん。そして、ヨコハマアートサイトが支援をしているサイト・イン・レジデンス実行委員会代表で、旧・深谷通信所周辺地域でアーティスト・イン・レジデンスプログラムを企画・運営している坂田太郎さんです。

「カドベヤで過ごす火曜日」をはじめ、ヨコハマアートサイト2015が支援する活動の中でも、拠点形成や、そこで生まれるコミュニティの醸成を目指す事業は少なくない。物理的な場所を持った活動に限らず、「『パークは僕らの秘密基地』プロジェクト」が連携を行ったプレイパークのように空間としてゆるやかに誰かを受け入れる活動もある。一人と一人が出会うその場にアートの力が求められている。

「まちを歩いてまちを見る」という行為に、「記憶」や「他者」という視点を見つけ、まちあるきがよりいつそう味わい深いものに感じた夜となりました。



【会場】深谷小学校コミュニティハウス 和室(横浜市戸塚区深谷町1688-2)【ゲスト】嶋田晶子(NPO法人 横浜シティガイド協会)、坂田太郎(サイト・イン・レジデンス実行委員会)【主催】ヨコハマアートサイト事務局

アーティストがある土地に通り、その変容に応答しながら創造活動を行うサイト。

アーティストや研究者など「他者の目」でまちを見る、ことの豊かさについて話すと、嶋田さんも「複眼で見ることでまちがわかってくる」と

語ります。

嶋田さんも「複眼で見ることでまちがわかってくる」と語ります。

嶋田さんも「複眼で見ることでまちがわかてくれる」と語ります。

嶋田さんも「複眼で見ることでまちがわかてくれる」と語ります。

嶋田さんも「複眼で見ることでまちがわかてくれる」と語ります。

嶋田さんも「複眼で見ることでまちがわかてくれる」と語ります。

嶋田さんも「複眼で見ることでまちがわかてくれる」と語ります。

嶋田さんも「複眼で見ることでまちがわかてくれる」と語ります。

磯子区民文化センター・杉田劇場は、開館して11年目です。館長として挨拶回りに出かけた時に、地元の方から「劇場もいいけど、本当は海が見える景色が欲しいんだ」といわれ驚きました。確かに、昭和40年代から工業地帯の開発が進み、市民が水辺に触れる場所が少なくなりました。海につながる掘割川でも、船に乗らなければ海は見えません。磯子という地名なのに。

それでも50代以上の人には「あそこは海だった」と確実に覚えています。年配の方の中には、戦時に根岸飛行場から南洋のパラオに飛んだ飛行艇のことや、杉田や屏風ヶ浦に広がっていた海苔の養殖地・ノリヒビのことを話す人もいます。海は見えなくなつたけれど、地域史や郷愁の中に、根岸湾の海があるのです。

そんな中平成22年に、新杉田駅から徒歩10分の場所に作られたのが杉田臨海緑地公園です。ただつ広いだけで特別なものが設置してある



臨海緑地公園は、磯子の人が心の中に持つている風景、日常の中の一コマとして人びとの記憶に刻まれます。そんな1コマに地域の文化拠点である杉田劇場も加えてほしいと願っています。私たちの劇場には「杉劇@助つ人隊」というボランティア組織があり、専業主婦から元照明家の方まで、文化に興味を持つ40人近くの方が登録しています。ロビー・コンサートの受付でモギリしたり、会場の飾りつけをしたりと精力的です。表現をする人の応援にとどまらず、少しでも文化芸術の現場に興味を持ってくれる方をサポートしたい。助つ人隊に応募した方と初めて会う時はいつも「杉田劇場で何をやつみたいですか?」って問い合わせるんです。趣味や興味を生かせる場所は文化の場にこそあります。日常のつながりの中にある文化といふものを、杉田劇場の中でも育てたいのです。

磯子区民文化センター・杉田劇場は、開館して11年目です。館長として挨拶回りに出かけた時に、地元の方から「劇場もいいけど、本当は海が見える景色が欲しいんだ」といわれ驚きました。確かに、昭和40年代から工業地帯の開発が進み、市民が水辺に触れる場所が少なくなりました。海につながる掘割川でも、船に乗らなければ海は見えません。磯子という地名なのに。

それでも50代以上的人は「あそこは海だった」と確実に覚えています。年配の方の中には、戦時に根岸飛行場から南洋のパラオに飛んだ飛行艇のことや、杉田や屏風ヶ浦に広がっていた海苔の養殖地・ノリヒビのことを話す人もいます。海は見えなくなつたけれど、地域史や郷愁の中に、根岸湾の海があるのです。

そんな中平成22年に、新杉田駅から徒歩10分の場所に作られたのが杉田臨海緑地公園です。ただつ広いだけで特別なものが設置してある

5 臨海緑地公園から眺める 磯子の海の記憶と 毎日の暮らし

(磯子区民文化センター・杉田劇場)

中村牧さん

地域文化の風景

事務局うろうろ日記

ヨコハマアートサイト事務局は、
今日も、横浜市内の
あっちこっちへうろうろしています。



6 12月5日(土)
相鉄線・いずみ中央駅をおり、地蔵原の水辺へ降りると、そこはまるで影絵の世界。今夜は「スマートイルミネーションいずみ 光と影の動物園」。たくさんの大人や子どもでにぎわい、まっすぐ歩くこともできません。木々はやわらかい光で彩られ、水面にも灯りが反射して、まるで「銀河鉄道の夜」にでてくる星祭りのようです。



8 12月19日(土)
JR長津田駅を降りてすぐの緑区民文化センター みどりアートパークにて9月より毎月開催しているNPO法人ぶかぶかの「みんなでワークショップ」へ。今日は、参加者の書いた詩の中から短い演劇のシーンをつくってチームごとに発表しました。脚本がないからこそ、参加者それぞれのアイディアが光る傑作が揃いました。



7 12月12日(土)
イベント目白押しなこの週末。本牧アートプロジェクト2015のバスツアー「ラクラク本牧旅行」で本牧のまちを冒険しました。3人の女優扮するバスガイドに連れられて築80年の古民家カフェでの演劇公演や、小学校の水族館などを堪能。本牧はまだまだ知らない顔がたくさん。日没後は、象の鼻テラス「シアターゾウノハナ」へ。



9 1月16日(土)
栄区・本郷台小学校はまっ子ルームにて、さかえdeつながるアート「つながるBIG絵本をつくろう!」ワークショップ。絵本作家とブックデザイナーの講師のもと個人での創作時間。一人で何枚も描いていく子、悩みながらじっくり仕上げる子、筆を使わず絵の具を盛り上げて3D作品づくりにいそしむ子など、つくる姿勢も個性豊か。



ヨコハマ アートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。
地域課題の解決につなげる
文化芸術活動をサポートする
ため、文化芸術の持つ創造性を
コミュニティやまちの活性化と結びつける文化
芸術活動や、横浜の個性ある
文化芸術を市内外へ発信する
活動を広く公募し、支援する
事業です。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局
(STスポット横浜、横浜市文化観光局、
横浜市芸術文化振興財団)
〒220-0004 横浜市西区北幸
1-11-15 横浜STビル 208
(NPO法人STスポット横浜
地域連携事業部 内)
TEL:045-325-0410
FAX:045-325-0414
WEB: <http://y-artsite.org>
MAIL:office@y-artsite.org

@Y_Artsite

f ヨコハマアートサイト

ヨコハマアートサイトに関するこ
とを中心に、横浜市内のさまざまな地域文化
活動について発信します。

季刊ヨコハマアートサイト Vol.007

発行 ヨコハマアートサイト事務局
編集 NPO法人STスポット横浜
テキスト 小川智紀 池田友実
弓井茉那
デザイン 相澤事務所
撮影 福井裕子
印刷・製本 合資会社 三島印刷所
協力 公益財団法人よこはまユース
発行日 2016年03月31日

季刊誌についてのご意見・ご感想も
お待ちしています。